

教育統制は国を滅ぼす

- 自由なローマ帝国を顧みて

田中敬文*

The National Control of the Education Destroys the Nation : Retrospect for the Roman Empire

Takafumi TANAKA *

* 東京学芸大学教育学部生活科学学科助教授 Assistant Professor, Home Economics, Dept. of Education, Tokyo Gakugei University 原稿受理 2004年10月20日
 専門は公共経済学。NPO等の市民組織が教育や芸術の現場で活躍できるような規制改革を望む。早稲田大学大学院単位取得退学、ジョンスホプキンス大学政策研究所研究員、東京学芸大学学長補佐等を歴任。訳書にE・ジェームズ他『非営利団体の経済分析』（多賀出版）、著書に八代尚宏編『社会的規制の経済分析』（日本経済新聞社）、喜多村和之編『高等教育の政策と評価』（玉川大学出版会）、苅谷剛彦編『創造的コミュニケーションのデザイン』（有斐閣）などがある。

「自由市場から国家による統制へ」- ローマの教育

塩野七生『すべての道はローマに通ず ローマ人の物語X』では教育に関する記述はそれほど多くはない。だが、その内容は、国家による教育統制に慣れきった私たちには衝撃的である。

ローマ帝国では自由な教育市場が存在していた。カエサルは、「公的な機関を設立し、それによって医療や教育の水準の向上に努めるのではなく、医師や教師たちを自由市場に放り出した」(P.195)。

教師にローマ市民権を与え、法的にも税制でも優遇する代わりに、授業料を徴収してもよいこととした。するとローマに優秀な教師が集まった。国定教科書やカリキュラムはなく、教材選択や教育法も教師の自由であった。ローマ帝国の教育制度では、初等・中等・高等教育は私立で、アカデミアのような研究機関のみが国立であった。

小学校といっても私塾である。その1か月分の授業料は非熟練労働者の日当程度であり、決して法外のものではなかった。

興味深いのは、キリスト教支配の強化とともに教育制度が公営化されたことである。教師は給料をもらい、授業料は無料となったものの、「教会が定めた書物以外は使ってはならない」こととなった。「授業料無料」の代償は誠に大きかった。それは、国教化の50年後に帝国が滅亡するほどであったのである。

この時代のローマの教育は、「自由市場から国家による統制へ」と制度化されたようである。教育システムは、歴史的に見ればこの統制と自由の狭間で

揺れ動いていると考えられる。

「学校的なもの」の存在

現在、初中等教育の大部分を私立が経営するという国はあまりないであろう。少なくとも初中等教育へは少なからぬ国家による統制がある。しかし、子どもたちがみんな公立学校だけで学んでいるわけではない。また、学校へ行っていない子どもたちや行けない子どもたちも国によっては存在する。

筆者が塩野氏の著書から呼び起こされたのは、実際に訪れた世界各地のさまざまな教育現場・訓練現場であった。筆者はこれまで、数カ所のNPO・NGOの現場を訪ねている。各地にはその国の教育制度の外に位置する「学校的なもの」が多数存在する。それらは正式の学校ではないから通う義務はない。しかし、「正式な」学校の後に子どもたちが通ってきたり、「正式な」学校へ行けない子どもたちが通ってきたりするなど、子どもや青少年の成長になくてはならない存在となっている。この著書に登場するローマ、アテネ、イスタンブールの他、ブラジルやチリも訪れたことがある。この著書では教育に関する記述があまり多くはないので、ここではローマ時代の学校に加えて、二つの「学校的なもの」の例を紹介し、日本の教育への示唆を考えたい。

イスタンブールの教育公園

イスタンブールには、トルコ教育ボランティア財団(TEVF: Education Volunteers Foundation of Turkey)が経営する教育公園(Education Park)がある。

この財団は1995年に設立された。TEVFはトルコ

全土に86の施設を持つ。それらは教育公園、学習センター、移動コンピューター・バス等からなる。2000年現在、全国で4,000人のボランティアにより20万人の子どもの面倒を見ている。財団は2005年まで毎年100万人の子どもの面倒を見るというキャンペーンに乗り出した。

訪問したFatih Education Parkは、かつてビザンチン体制下にあったイスタンブール旧市街近郊にある。TEVFが買収するまで、この地は農産物市場がゴミ捨て場となり、やがて麻薬天国にまで落ちぶれた場所であった。ここには普通教室、ワークショップ、コンピューター・ラボ、科学・ラボ、実習室、図書室、屋外スポーツ施設等が備えられており、専任スタッフの他、大学生がボランティアとして子どもたちの指導にあっている。

筆者が訪れた2001年当時、大学生ボランティアが子どもたちにパソコンを教えていた。英語を学ぶ子どもたちは、筆者に英語で自己紹介してくれた。TEVFは財団というNPOの一種である(トルコではすべてNGOという)。土地を無償で利用できる他は、政府から財政的な支援は受けていない。財団の収入は個人や企業からの寄付で賄われている。施設のパソコンは企業から現物寄付されたものである。この「学校的なもの」へ政府はお金も口も出していない。子どもたちの生き生きと学ぶ姿を見ると、彼らの生活に欠かせないものになっていることがわかる。担当者の解説によると、トルコのある村の教育公園で学んだ子どもが、その村から初めて大学へ進学することができたという例が生まれているという。

ブラジルのサンバスクール

サンバはブラジルの夜空を彩る夏の風物詩である。MANGUEIRA(マングエイラ)はリオ・デ・ジャネイロにあるサンバスクールである。この団体のパレード「十戒 Ten Commandments」は、2003年3月3日のカーニバルで優勝した。1928年に設立されたこのスクールにはパレードを訓練する設備が整い、過去の衣装や楽器を並べた展示室では、サンバの歴史を学ぶことができる。小さな子どものうちから専門家がサンバの踊り手や楽隊を養成したり、豪華な衣装の製作を指導したりしている。スクールの会長室を飾る多くのトロフィーが伝統を物語っている。

筆者がスクールを訪れたのは平日の昼間であった。昼食後、サンバの踊りや音楽の訓練を受けている子どもたちが成果を披露してくれた。将来のパレードを夢見るこの子どもたちは正規の学校へは通ってい

ないということであった。

MANGUEIRAの独創的な点は、サンバスクールにのみにとどまらず、多彩なスポーツ、教育・訓練、福祉事業を、大学や州・企業との共同により行っていることにある。

例えば、「プロジェクト・オリンピック」は、文字どおり、オリンピックで活躍できる選手を子どものうちから養成している。サッカーはもちろん、陸上競技、バスケットボール、リズム体操、水泳、ビーチバレー等のコースがある。特にサッカーは人気スポーツであり、校長室には、この施設を訪れたスポーツ大臣ベレやジーコをはじめとして、クリントン元大統領の写真も飾られている。

「プロジェクト・エデュケーション」は、図書館やランチルームが設けられた「教育総合センター」を中心に、リオの教育省との協力により読み書き等の基礎学力はもちろん、子どもの興味に応じて、水泳、コンピューター科学、絵画、カポエイラ(スポーツダンスの一種)やストリートダンス、リズム音楽を教えている。「プロジェクト・トレーニング・ワークショップ」は企業との協力により、美容や理容、栄養等、青少年の就業を促進させるようなさまざまな技能の習得に取り組んでいる。そのほか、若い勤労者向けのキャンプを実施したり、これまで学ぶ機会のなかった成人向けに基礎教育を行ったりしている。また、スポーツ選手向けの医療やりハビリ、セラピーのほか、妊婦や乳幼児向けに健康診断や保健衛生を行うデイケアもある。

このようにMANGUEIRAは、芸術NPOと一言では言い表せないほど多彩な活動を行っており、地域の人々にはなくてはならない存在になっているのである。

ローマ時代の教育や「学校的なもの」が示唆すること

授業料が無料で、「教会が定めた書物以外は使ってはならない」帝国は滅亡した。他方、現代日本の義務教育は、授業料は無料であるが、国が定めたカリキュラムに従い、国の検定をパスした教科書を用いることになっている。まさか帝国のように日本が滅亡することはないと思いたいが、近年、国力が低下しているという議論も散見される。

それでは、ローマ時代の教育や「学校的なもの」が日本の教育に対して示唆することは何か？

第一に、学校の多様な設置形態を認めることであ

る。

トルコの教育公園やブラジルのサンバスクールに相当するのは、日本では学習塾やお稽古事教室であろうか。サンバスクールでは、子どもの個性と能力に応じてさまざまなプログラムが用意されていた。それらは正規の学校ではないNPO・NGOが経営している。日本では、構造改革特区において、ようやくNPOや株式会社による学校設立が認められることとなった。まだ数は多くはないが、既存の学校と対抗できるよう期待したい。

第二に、学校に独自のカリキュラムを認めることである。

構造改革特区において、例えば、英語を重視したカリキュラムを組む学校があるものの、国が定めたカリキュラムとまったく異なる学校はまだ現れない。検定教科書とは異なるものをすべての教科で使う学校があってもよいと思うが、どうであろうか。カエサルが教材選択や教育法を教師の自由に任せた結果、

ローマに優秀な教師が集まった。教師の創意工夫や意欲を高めるシステムこそが求められよう。

第三に、学校で職業志向型の教育を行うことである。

海外のNPO・NGOの現場を見て強く感じるのは、「学校的なもの」の多くで仕事を意識した教育や訓練を行っていることである。ローマ時代は身分や階級が固定的なこともあり、学校では古典を中心に学べばよかったのであろう。しかし、フリーターやニートの問題が指摘される日本では、学校での職業志向型の教育が必要である。企業人が学校で仕事を語ったり、現場へ子どもが出かけて仕事を体験したりすることが望まれる。もちろん教師も、企業やNPO・NGOの現場を深く知るべきであろう。

以上の三点は相互に関連している。多様な設置形態で、独自の方針を持つ学校が自由に競争することが、今の日本の教育に求められていると思う。